

ポポフ ニュース

2004年6月号

No. 11



ポポフ (POPOF) はポレポレ基金 (Pole Pole Foundation) の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立された NGO (非政府・非営利団体) です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕する東ローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコ・ツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、東ローランドゴリラを題材にした絵はがきを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと思います。



▶ 伝統的衣装を着てダンスをする。





活動報告 (2003年6月から2004年5月まで)

2003年 6月22日

- 第12回アフリカ・カルチャー講座
「アフリカのゴリラたち」講師：山極寿一
主催：(株)道祖神 ハービスPLAZA(大阪市)

7月6日

- 東山動物園友の会講演会
「ゴリラの子育て」講師：山極寿一
東山動物園 (名古屋市)

7月8日～13日

- 早川篤の石ゴリラ展 堺町画廊 (京都市)

7月12日

- ワークショップ「石でゴリラをつくるワークショップ」
講師：早川篤 堺町画廊 (京都市)

10月25日

- 大阪市図書館フェスティバル
「うたって おどって アフリカ アフリカ」
ポレポレワブナ 東淀川図書館 (大阪市)

11月13日～15日

- 第6回サガシンポジウム
山極寿一「ポポフ活動報告」多摩動物公園 (日野市)

11月15日

- 大阪市図書館フェスティバル 子ども会
ポレポレワブナ 大阪市中央図書館 (大阪市)

11月17日

- 講演「カフジ・ビエガ国立公園での野生生物保護活動
(ポポフ)の紹介」講師：山極寿一
源小学校 (千葉市)

12月24日

- 子ども文庫やかまし村クリスマス会
「うたって おどって アフリカ アフリカ」
ポレポレワブナ 高野第三住宅集会所 (京都市)



↑早川さんの石ゴリラワークショップ

2004年 1月17日

- 「アフリカのこと もっと知ろう 友だちになろう」
ポレポレワブナ 左京図書館 (京都市)

3月13日

- 「アフリカを感じてみよう！ ジンガくんといっしょ
にゴリラになろう！」
ポレポレワブナ 田原市中央図書館 (愛知県田原市)

3月23日～4月4日

- 「ゴリラとあかいぼうし」原画展
田原市中央図書館 (愛知県田原市)

4月～12月

- 特別展示「類人猿展」、「ゴリラ展」
王子動物園動物科学資料館 (神戸市)

5月23日

- 「みんなで踊ろう！ゴリラダンス」
ポレポレワブナ 王子動物園ホール (神戸市)



ポレポレワブナは、歌：おきゃん、ダンス：みつきー、お話し：のじこ、の3人の集まりです。コンゴ民主共和国の2冊の絵本「ゴリラとあかいぼうし」と「ジンガくん

いちばへいく」の読み語り、「ゴリラとあかいぼうし」に載っている「ゴリラとあそぼう」の歌にゴリラのふりを付けたダンス、ゴリラクイズ、アフリカの歌などを楽しみながら、子どもたちがアフリカを知り、親しみを持ってくれればと思って活動しています。ゴリラダンスは子どもたちに大人気！

会計報告

収入	昨年度よりの繰越金・	1,354,416
	講演会・シンポジウム カンパ・	20,990
	展覧会売上・	108,905
	作品売上寄付・	56,010
	ポポフグッズ売上(現金)・	12,760
	ポポフグッズ委託販売・	16,706
	寄付(現金)・	133,270
	売上・寄付(郵便振替)・	700,000
	受取利子・	20
計・		2,403,077

支出	ニュースレター印刷費・	40,950
	ニュースレター・ホームページ作成費・	24,000
	ポポフグッズ材料費・	4,929
	郵送費・	59,870
	ポポフへ送金・	2,129,775
	次年度へ繰越金・	143,553
計・		2,403,077

※「ろうきん東海NPO団体等寄付システム」から、寄付金をいただいています。



ポポフの狩猟採集民救済計画と 環境教育 バサボセ・カニユニ

2003年から2004年にかけてポポフは多くの活動をしてきましたが、なかでも狩猟採集民のトゥワ人に対して最も力を注ぎました。彼らは1970年にカフジ・ビエガ国立公園が設立されて以来、何の補償も受けられずに住む場所や働く場所を探し求めてきました。そのことが彼らを密猟に駆り立てた大きな要因となっていたのです。

昨年ポポフは、3つの村（ブユングレ、ビリンドウワ、ムヤング）に居住するトゥワ人の女性を集め、ミシンを提供して洋裁を教え始めました。この事業は大変功を奏し、彼女たちはミシンで作成した服を売ってお金を得ることができました。そのお金で、塩、魚、キャッサバ粉、ヤシ油、ロウソク、ウズラマメや大豆を購入して、トゥワ人コミュニティの店に貯蔵することになりました。

今まで、トゥワ人たちは安定した現金収入がなかったために、食料や日用雑貨などを蓄えておくことができませんでした。畑の手伝いをしても十分な賃金をもらえず、夫たちは住み慣れた国立公園の森で密猟をして、稼いだ金はすぐお酒に消えてしまいます。妻たちが現金収入を得ることで、安定した暮らしを管理することができる、とポポフは考えたのです。夫たちも妻の言葉にしたがって、しだいに密猟をやめ、公園管理の仕事を手伝うようになりました。

ポポフは、これまでトゥワ人たちのために耕地を村人たちから借り受け、作物の種、農耕具を提供して、自活できることを目指した支援活動を実施してきました。もはやこのあたりでは国立公園以外に豊かな森は残っておらず、トゥワの人々が狩猟採集によって生計を立てていくことは不可能になってしまったからです。彼らが自立するためには、これまでの経験を生かして公園の仕事をするか、農業、商業、運送業など農村型、都市型の暮らしに順応していくしか道はないのです。

昨年、ポポフはカレヘ地区へとこの事業を広げ、40のトゥワ人家族にトウモロコシの種とウズラマメを配りました。また、20ヘクタールの土地を借り受けて彼らに耕地として提供しました。これを有効に活用して、自活への道を切り開いてほしいと思っています。

識字教育を広げ、その能力によって自然を保護する意義を理解できるように、ポポフは環境教育を推進しています。私たち中央科学研究所の研究者は、6歳から12歳までの初等教育のクラスを3つ受け持ち、計126人の子どもたちを教えています。また、ポポフは子どもたちのための環境クラブを設立して、子どもたち自身の自然保護活動を支援しています。この環境クラブには現在34人の子どもたちが入会しており、それぞれが住んでいる村で自然保護の情報を熱心に伝えています。これらの子どもたちは公園職員の許しを得て公園内で植物や動物を観察する会を定期的に開いています。

私たち研究者はこれらの子どもたちを研究所に招待して、

自然科学の知識や考え方を標本や生きた教材を使って紹介しています。教育が停滞しているこの国では、知識欲のある子どもたちの希望をどうかなえていけるかがとても重要です。日本の皆さんの暖かいご支援とご協力をお願いしたいと思っています。



↑ ムガルカとジョン・カヘークワ

ジョン・カヘークワ カフジ・ビエガ国立公園の現状

1996年の10月以来、度重なる内戦によって自然保護区は荒らされ続けてきました。さまざまな政治勢力の兵隊たちと周辺の住民が森の中を歩き回り、食料としての動物の密猟、炭材や建材の切り出し、薬用植物の採集を頻繁に行ってきたのです。かつて数多くのゾウやゴリラが闊歩していたカフジの森には、もうゾウの姿はほとんど見られず、ゴリラも100頭前後に減ってしまいました。

残されたわずかな資源と動物たちを守ろうと、ポポフのメンバーは国立公園の職員と協力して密猟の防止にあたり、公園周辺の村々を回って自然資源の保全を訴えてきました。ポポフ日本支部から寄せられた援助によってこの1年、以下の事業を継続することができました。

1. ポポフ事務所は、ジョン・カヘークワ（代表者）、ムスタファ・ピカバ（事務局長）、ジェルベ・イググ（会計）、ダビッド・ビシームワ（アート・ディレクター）によって維持・管理されています。
2. 美術工芸センターはダビッド・ビシームワの指導の下、5人の職員が働いています。
3. 洋裁センターには24人のトゥワ人と24人のバンツ一人が働いています。すべて女性で、多くの夫は元密猟をしていた経験があります。
4. 環境教育学級は、12クラス（初級と中級）が開講し、8人の先生が子どもたちを教えています。
5. 苗木センターは4箇所あり、12人の職員が4万本の苗木を育てて周辺の村に配りました。

この苦難の時代にこのような夢のある事業を行うことができたのは、日本にいる皆さんの励ましと支持のおかげだと思っています。くじけそうになる私たちに勇気を与えてくれた日本の皆さんに心からお礼を申し上げます。神様の祝福がポポフを通じて日本とコンゴの人々に与えられることを祈ります。

ゴリラたちの近況 山極寿一



この1年、ポポフはカフジ・ビエガ国立公園の職員と協力して、生き残ったゴリラたちの保護に努めてきました。国立公園がモニターしているゴリラの集団は4つあります。ムガルカ集団、ミシエベレ集団、ムファンザーラ集団、ビリンドウワ集団です。このほかにガニヤムルメ集団という、コンゴ中央科学研究所と京都大学がモニターしている集団もあります。これらの集団へは3～5人の担当者が毎日訪問して、いなくなった個体はいないか、病気や怪我をした個体はいないかチェックしています。公園内にはまだ武器をもった反政府ゲリラや密猟者が活動しているので、担当者もあまり遠くへは出かけられません。ゴリラたちが森の奥深くへ移動してしまうと、担当者たちも会いに行くことが困難になります。いくつかの事件が、こうした時に起こりました。

ポポフニュース10号で、ムガルカ集団がソソという若いシルバーバックと衝突し、ほとんどのメスがこのオスのもとへ移籍してしまったことを報告しました。ソソは1986年にマエシエ集団に生まれ、今年18歳になります。今回自分の

集団を持ったことで、名をチマヌーカと改めました。この名前は、長年この国立公園でトラックをしていて昨年亡くなったチマヌーカさんからもらいました。チマヌーカさんは1978年以来の私の古い友人で、よくいっしょに森を歩き、地酒を酌み交わした仲です。彼の優しい丸い目と、かみそりのような強靱な身体をなつかしく思い出します。

肺病もちで、よく咳をしていましたが、こんなに早く亡くなるとは思っていませんでした。ご冥福をお祈りします。ゴリラのチマヌーカにはぜひ健康で長生きしてもらいたいと思います。12頭ものメスたちに囲まれているのだから、幸せの絶頂でしょう。

さて、メスを失ったムガルカは、たった1頭残ったルシャシャというメスと3歳になったその子供のチュバカといっしょに3頭で暮らしています。あまり、遠出をせず、国立公園のステーションの近くにいて、もうすっかり地元の人とも顔なじみになりました。ムガルカは小さいときに片手をワナにはさまれて、手首から先を失っています。でも人間を敵視することなく、今では信頼できる友達になりました。何とかこのいい関係を続けていってほしいものです。

不幸なことに、ミシエベレ集団が消えてしまいました。昨年の2月に消息を絶ってから行方知れずになっていたの

ですが、どうやらシルバーバックのミシエベレが密猟者によって殺され、メスや子供たちが散り散りになってしまったと考えたほうがいいようです。ミシエベレ集団が監視の目が届かない遠くへ出かけたときに起こった出来事で、そのあたりでゴリラが密猟者に襲われたという話が伝わってきたのです。9月に、すっかり骨だけになった大きなオスの死体が見つかりました。おそらくミシエベレだろうと考えられています。しかし、ミシエベレ集団は39頭という大集団でした。すべてのゴリラが殺されてしまったとは考えられません。生き残りのゴリラはいないか、現在捜索中ですが、今のところ詳しい消息は不明です。無事でいてほしいと願っています。

ビリンドウワ集団は、8月にランガという集団と衝突し、2頭のメスを失いました。また、9月にも別の見知らぬ集団と衝突して2頭のメスを失い、現在は9頭で暮らしています。元ニンジャ集団にいたイラギ、カンバ、ゾヴ、クワレはビリンドウワのもとに残っています。昨年の初めにはゾヴのお腹が大きかったので、赤ちゃんが生まれると期待していたのですが、まだ生まれていません。ひょっとしたら、他の集団と衝突した際にショックを受けて流産してしまったのかもしれません。残念なことです。

4つの集団のうち、唯一変わりが無いのがムファンザーラ集団です。シルバーバックのムファンザーラに8頭のメス、3頭の子供、そして2頭の赤ん坊を合わせて14頭の集団で暮らしています。この集団は遊動域が広く、時折モニターできない遠い場所へ移動してしまうのでとても心配です。

ガニヤムルメ集団は、バサボセさんやビチブ（ムワミ）さんたちが協力してモニターしています。若いシルバーバックのアルフォンスが3頭のメス、2頭の子供たちと暮らしていましたが、昨年新しく3頭のメスが加わりました。アルフォンスもやっと一人前のオスとして認められ始めたのでしょうか。早く父親のガニヤムルメのような、堂々としたオスに育ってほしいと思っています。

今年の5月には、WCS（野生生物保護協会）やGTZ（ドイツ国際技術協力）の援助でカフジ・ビエガ国立公園の総合調査が始まりました。ゴリラ、ゾウ、チンパンジーなど大型哺乳類の生息状況を調べて、2000年の調査の結果と比較しようというのです。ジョン・カヘークワさんやバサボセさんをはじめポポフのメンバーが参加しています。現在（6月）はブカヴ近郊で戦闘があつて調査が中断していますが、早く平和になって多くの人々が調査に参加できるようになってほしいものです。いい結果が出ることを願っています。



↑調査：ゴリラのベッドを計る



↑調査：みんなでゴリラを観察

千葉市立源小学校の子供たちの感想

山極寿一



昨年の11月に千葉市の源小学校でカフジのゴリラの現況とポポフの活動についてお話をしました。4年生の1人の生徒が、ダビッド・ビシームワと私がつくった絵本を大きな声で読んでくれました。元気な声と笑い声がとっても印象的な生徒たちでした。この度、4年生の生徒たちが感想文を送ってきてくれたので、いくつか抜粋して以下に記しておきます。

- ◆ 本を読むとき、少し緊張して練習のせいかをだせませんでした。ゴリラの声など予想していたよりも低い声でした。
- ◆ 絵本もないのに、昔話を知っているなんてすごいと思いました。しぜんを守るポポフもゴリラにとっても人にとってもいいことと思いました。
- ◆ ゴリラはすごい人になているんだなあと思いました。ぼくもポポフのメンバーになってしぜんをふやしたくなりました。
- ◆ 絵本のゴリラの鳴き声がいろいろあっておもしろかった。アフリカの子どもたちもよくわかりました。
- ◆ 本のよみかた、マティー村の子どもたちのことなどをおしえてくれてありがとうございます。
- ◆ ゴリラは笑えるなんてしりませんでした。ゴリラの声までしれてすごうれしかったです。

まだまだたくさん感想があるのですが、とても紹介し切れません。まとめてこの3月に日本へやってきていたバサボセさんに託して、ポポフの子どもたちに伝えてもらうことにしました。今度はコンゴの子どもたちのゴリラや絵本に対する感想を聞きたいと思っています。



ポポフのホームページ

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/Popof/index.htm>

ポポフの活動紹介、カフジ・ピエガ国立公園、東ローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。来日したポポフのアーティスト、ダビッド・ビシームワが製作したアートも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

ポポフ・グッズ通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に口座番号：00810-1-90217, 加入者名：ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。★は新製品です。

☆ポポフ絵はがきセット（10枚組）	1000円
☆ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット（5枚組）	600円
☆東ローランドゴリラ・ペンダント	2200円
☆東ローランドゴリラ・キーホルダー	2200円
☆ポポフペンダント	1200円
☆どこでもゴリラ・ブローチ（木彫り）	3000円
★ケイタイ・ストラップ（ポポフ）白 or 黒	1600円
★ケイタイ・ストラップ（木彫ミニゴリラ）	3500円

連絡先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室
ポポフ日本支部



お願い：上記のようなポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

昔サルとカメレオンはとっても仲よしでした。あるとき一緒に、ながいながい旅にでました。歩いていると、ムチキチと呼ばれるヤシの木に、酒が造ってあるのをサルを見つけました。

「ああ、のどが渇いてしょうがない。おやっ、いい所に酒があるじゃないか、ちょっといただくとするか」

カメレオンは首を横にふりました。

「だめだめ。人間の酒を飲んだりしたら、ろくなことはないよ。さあ先を急ごう」

けれど、サルはカメレオンの注意に耳をかきませんでした。あっという間にヤシの木に登り、すばやく酒を飲んでしまいました。

しばらくして、酒を造っていた男が様子を見に来ました。

「おやっ、これはどうしたことだ。わたしの酒を誰かが飲んだな」

男はあたりを見回して、足跡を見つけました。

「うん、どうも二人連れがここへ来たようだ。きっと奴らが飲んだに違いない」

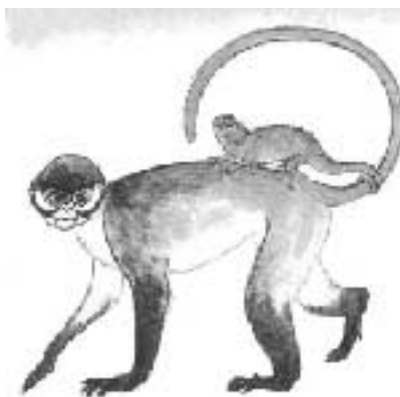
男は急いで、足跡を追っていきました。サルとカメレオンが歩いているのを見つけると、つかまえて聞きました。

「わたしの酒を飲んだ奴は誰だ。ええっ、どっちなんだね」すかさずサルが答えました。

「はい旦那、一目で分かるでしょう。それは酔っ払っている方ですよ」

男はなるほどと思い、サルとカメレオンをじっと見ていました。そして、酔っ払っているのはカメレオンだと思いました。なぜならカメレオンの歩き方は、のっそりのっそりと酔っ払いのようなのです。

男はカメレオンを、ひどく打ちました。



ようやくカメレオンが許されると、また旅を続けました。人間の村の近くまでやって来ると、カメレオンが言いました。

「寒くなってきたねえ。ぼくは寒いと歩けないんだ。サルくん、すまんが火をおこしてくれないかい」

サルはカメレオンの頼みを聞いて、火をおこしました。サルとカメレオンが火にあたっていると、火はどんどん大きく燃え上がって行きました。そして、ぼうと一軒の家に燃え移ってしまいました。

火は、ぼうぼうと家々を焼いて行きました。

怒った村人たちがやって来ました。

「誰だ、火をつけた奴は」

こんどはカメレオンが先に答えました。

「誰が火をおこしたか、手を見ればわかるでしょう」

村人はサルとカメレオンの手を見ました。するとサルの手は真っ黒でした。サルは捕らえられ、とてもひどい目に合いました。

アフリカのサルは手が黒い。

ヤシの木を切り倒し、樹液を容器で受けておくと、発酵してヤシ酒になる。

訳／絵：伏原納知子

催しのご案内

4月～12月

●特別展示「類人猿展」、「ゴリラ展」

王子動物園動物科学資料館(神戸市)

ヒガシローランドゴリラやポポフの活動紹介をしています。

11月12日～14日

●第7回サガシンポジウム「動物園教育と環境教育」

京都大学時計台百周年記念館

12日はジェーン・グドールさんの記念講演、14日は京都市動物園で類人猿保護の活動紹介と特別講演があります。

近刊案内

■ 池谷和信編 『地球環境問題の人類学』 世界思想社

■ 松田素二著

『呪医の末裔—東アフリカオニョー族の二〇世紀』 講談社

■ 柴田都志子著

『動物研究者ダイアン・フォッシー』 理論社

■ 木村大治著 『共在感覚—アフリカの二つの社会に

おける言語的相互行為から』 京都大学学術出版会

■ 寺嶋秀明編

『平等と不平等をめぐる人類学的研究』 ナカニシヤ書店

■ 田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編

『遊動民—アフリカの原野に生きる』 昭和堂

■ 杉村和彦著

『アフリカ農民の経済—組織原理の地域比較』 世界思想社

■ エコソフィア12号特集

『ニホンザルのイモ洗い発見から50年』 昭和堂

■ 西田正規・北村光二・山極寿一編著

『人間性の起源と進化』 昭和堂

■ 山極寿一著 『オトコの進化論』

ちくま新書

■ 村山美穂著

『遺伝子は語る—霊長類から人類を読み解く』 河出書房新社

■ デビッド・スブレイグ著 『サルの生涯、ヒトの生涯—人生計画の生物学』 京都大学学術出版会